

三田 すごい、深いな。

松嶺 なので、なんかネタとしてはいっぱいあるんですよね。時代が変わる中で、いつもアンテナ貼っているの。これはこういうことなんじゃないかなって自分で解釈して、やっぱり人より先にメッセージを出す。やっぱり自分の個を確立するっていう話では、みんながこの事象について、今起きている現象について、自分のスタンスはどうなんだ、自分のメッセージはどうなんだっていうことを恐れて言わないじゃないですか。それを先に言うというのがアーティストの役割で。だから相当怖かったりするんですよ。やっていることが外れているかもしれないし。失敗と表裏一体なので。怖いんですけど、先にメッセージを出す。それをいつも心がけています。大変なんですよ、なかなか。先に表現しないといけないし、そこを一番見られているし。その表現がずれていれば、まったく逆のほうにいっちゃうので。

金野 それが時代と添い寝っていうキーワードが出てきますよね。

松嶺 そこにお金もかかるっていう話で。だけど先にアーティストがメッセージを出して、一番先に叩かれる。相当面白いんですけど、相当怖いです。

金野 でも誰かがやったことを後追いしちゃうと、それはオリジナルではないですもんね。

松嶺 まったくね。完全無視されますね。

金野 常にオリジナルであるためには半歩先とか。前のことをやらないといけないですもんね。

松嶺 ちょっと違和感を少し与えてあげるくらいの早さと、自分なりの意見と。

金野 遠すぎてもぼかんとされますしね。

松嶺 そうなんです。だからあそこの2階に本当の現代アートっていうと、わけのわからないオブジェができる。ただ見た人がまったくわからなければ、なんのメッセージもないので。

金野 じゃあやっぱり今のこの状況はお二方にとってもポジティブになっている？漆の価値を再発見してもらっていたり、アートもすごい浸透しているじゃないですか。それは追い風にはなってます？

松嶺 そうですね。やっぱりテーマ性っていうか、トピックとしては追い風になっている。商売的にはきついんですけど。

金野 けどそれがゆくゆくはめぐりめぐって、将来的についてきますよね。

松嶺 だからより SNS とかを見直したりして、そしたらそっちからお誘いがあったりとか。

金野 海外展開とかも今後されていくんですか？

松嶺 そうです。つい二日前にアートフェアドバイに出さないかって。その時も漆かなと考えているんですけど。

金野 そこはいいと思ったものを感覚で答えてくれる方たちがいるので、需要がありそうですね。それはいつくらいに？

松嶺 来年3月です。

三田 オンライン中継とかしたいですね。ドバイと。

金野 いいですね。けどやっぱり世界の方たちはアンテナを張ってる方たちがいて、そういうのは発信しないから伝わらないんですよ。

松嶺 声がかからなかったら発信力が足りていないんだなと思いますね。もちろん自分のやっていることのクオリティーと発信力がちゃんと足りていれば声がかかるので、この時代でもね。

金野 クオリティーは本当に大事ですね。そこと漆とのコラボはなによりでしたね。最強タッグ。

松嶺 松沢さんとお話をしていて、もう一個作りたいのが増えちゃいました。アクセサリが作りたいなと思って。真っ黒のダイヤモンドが作りたいたい。そのネックレスを作りたいなと勝手に思っています。

松沢 漆黒の。かっこいいですね。

金野 持ち運べるっていうのもキーワードですよ。

松嶺 一点物をつくってもそれはそれでいいんですけど、みんなが手に取れるものを作りたいなと思って。

金野 ありそうでないのは、缶バッジとかってあるんですか？

松沢 漆の缶バッジはないと思いますね。

金野 それだったらつけて歩いていいですよ。小学生とかもつけれる。ガチャガチャで買ってもおもしろいですよ。

松沢 上米内で売っているんです。漆のガチャガチャ。ちょっと高いんですけど。やると小さいお椀が出てくるんですよ。本格的に塗ったので。

金野 そういうところから入って、質感とかを確かめてもらうのは大事ですよ。缶バッジってメディアだと思っていて、そこから発信していくのはいいなと思います。

松沢 いいですね。缶バッジ。

三田 やっぱりさっきのフィギュアを送ってというのもそうですし、やっぱりリアルなものっておもしろいですね。すごい面白いですね。

金野 形に残るものってね。それがうまいこと保存すれば残るっていうのはいいですよ。